

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**プロジェクト研究（共同プロジェクト研究）**  
**2016年度研究【経過・成果】報告書**

研究代表者	所属部局・職		氏名			
	文学部・教授		栗田 和明 印			
研究課題	頻繁な移動者がつくる移民コミュニティの研究 ——環太平洋地域の現況に注目して——					
研究組織 (研究代表者・ 研究分担者) 2017年3月現在	所属研究機関・部局・職		氏名			
	立教大学・文学部・教授		栗田 和明			
	立教大学・社会学部・教授		水上 徹男			
	立教大学・観光学部・教授		大橋 健一			
	立教大学・観光学部・教授		杜 国慶			
	立教大学・文学部・教授		市川 誠			
早稲田大学大学院・ アジア太平洋研究科・教授		ファーラー, グラシア				
研究期間	2015年度～ 2016年度					
研究経費※ (上段: 支出金額)	2015 年度		2016 年度		年度	総計
	3,975,358	円	1,993,376	円	円	5,968,734 円
(下段: 採択金額)	4,000,000		2,000,000			6,000,000

※1円単位で記入

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、環太平洋地域に形成される移民社会の動態を比較研究し、同時に移民研究において移動している者に注視することの必要性を示す。数週間程度の滞在で頻繁にトランスナショナルな移動を繰り返す「頻繁な移動者」(frequent traveler、以下 FT)を中心に形成される移民コミュニティに注目し、人の移動研究にあらたな研究の視角を提案する。移動する者に注目する結果、滞在している者、動かない者、に注目する従来の研究視角では看過されてきたところがあると指摘する。人を基本的には動く者としてとらえ、動かない者とされた人びとも緩慢な移動者(slow travelers、ST)と位置づけ、STとFTが結ぶ複数の社会の紐帯の様相を示す。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[移民社会] [頻繁な移動者 (FT)] [環太平洋地域]

## 研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究プロジェクトは、2011～2014 年度の科研費による研究「環太平洋地域における移住者コミュニティの動態の比較研究——近年の変遷に注目して——」(基盤 A 海外研究、代表は栗田) で取り上げたテーマをより深化させるものである。また、プロジェクト構成メンバーは立教大学 平和・コミュニティ研究機構(以下、平・コミ)所属の研究者、および前掲の科研プロジェクトに参加のメンバーから構成されている。

従来の研究プロジェクトの課題に加えて、本 SFR プロジェクトでは、「頻繁な移動者、FT」により注視している。従来は移民社会の研究においても定住している者の視点を中心にがちであった。これに対して移民コミュニティの要素として FT の重要性を示し、FT の視点からの移民社会の記述を試みている。

2015 年度からの研究開始で、2016 年度が 2 年目、最終年度にあたる。2 年間の研究の結果、以下のような成果をあげることができた。

○従来の移民社会研究では、ホスト社会内に長期的に滞在する長期滞在者や、移入してきた移民たちの結節点になる各種の施設(宗教施設、DVD ショップ、レストラン、理容美容室など)に注目したものが多かった。複数の移民社会の比較動態的研究をすすめ、1) 長期滞在者や施設も数年単位では変化を続けていること、2) 少数の長期滞在者や施設の周辺に桁違いに多い短期滞在者がいること、3) 短期滞在者は一つの移民社会だけでなく、各地の移民社会を結んでいること、を指摘することができた。

○移民社会研究において、滞在する者を中心に見るのではなく、移動する者を中心に移民社会を、ひいては人類の生活全般を見ることを試行している。その一環として頻繁な移動者(FT)と緩慢な移動者(ST)を提案した。移民社会での人びとを滞在の観点から長期と短期で分類するのではなく、すべての人びとは移動者と位置づけて、その中で頻繁な移動をする者と緩慢な移動をする者とに分けている。FT と ST の応用は、交易人、出稼ぎ、留学、巡礼、観光などの諸活動にも可能であると予想している。

こうした発想はかならずしも人口に膾炙していないが、従来の滞在を中心にした視点と補完し合いながら人類の生活の記述に貢献出来るように育てていきたい。

○チームとしては研究成果を以下のように発表した。研究プロジェクト参加の個別の研究者の成果については、様式 3 を参照願いたい。

## ○刊行物(2015 年度)

『流動する移民社会——環太平洋を巡る人びと——』昭和堂。総ページ 170 ページ、編集は栗田、SFR プロジェクト参加メンバー 5 名、その他 1 名が分担執筆して昭和堂で刊行した。執筆者名と章題は以下のとおり。

- 1 章 栗田 和明「移動する者から見た移民コミュニティ——広州へのタンザニア人交易人に注目して——」
- 2 章 ファーラー、グラシア「移民とエリート階級の形成——中国人富裕層の国外移住——」
- 3 章 大橋 健一『リトル・サイゴン』の現在——在外ベトナム人コミュニティの成熟と意味転換——」
- 4 章 三島 禎子(SFR プロジェクトメンバー以外)「アフリカ系商人の富裕化への軌跡——ソニンケ人商人の移動と生活の営み——」
- 5 章 杜 国慶「移民と帰化——日本における帰化人口の分布と時空間変化——」
- 6 章 市川 誠「フィリピン人移民と宗教——オーストラリアと日本の教会にみる——」
- 7 章 栗田 和明「移動する人の現状と研究視点——移民の文化への注視——」

○国際シンポジウム(2015 年度) 2016 年 3 月 17～18 日 INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON “Migration and Tourism Infrastructures in Global Cities” として開催した。

Co-organised by: Sustainable Tourism Research Cluster, Universiti Sains Malaysia, Penang and Rikkyo Institute for Peace and Community Studies, Tokyo

Venue: School of Housing Building and Planning, Universiti Sains Malaysia, Penang

研究【経過・成果】の概要 つづき

シンポジウムでの SFR 関係の発表者は以下のとおり。

- ・Kazuaki KURITA “Dynamic Equilibrium of Immigrants’ Society: A Case of Tanzanian Traders in Guangzhou”
- ・Guoqing DU “Spatial Structure of Inbound Visitors’ Destination by APP Data”
- ・Tetsuo MIZUKAMI “Urban Regeneration Policies and Local Cultural Heritages: A Case of Toshima City in Central Tokyo”

○公開シンポジウム (2016 年度) 2017 年 2 月 18・19 日に以下の内容で公開シンポジウムを立教大学で開催した。これは SFR2 年間のまとめの意味を込めており、SFR メンバーと関係研究分野の研究者をまじえて開催した。

- ・「移民研究において頻繁に移動する人 (FT) に注目する可能性」 栗田和明
- ・「在日アフリカ人と東アジア交易——米国の黒人文化をめぐる人とモノの移動——」 松本尚之 横浜国立大学 准教授
- ・「南アフリカのグローバル都市構想と移民社会」 宮内洋平 本学アジア地域研究所 - 特任研究員
- ・「韓国首都ソウルの結節機関とアフリカ人の集合——イテウォン地区と郊外アンサン——」 和崎春日 中部大学教授
- ・「ベトナムをめぐるもう一つの人の移動の回路」 大橋健一
- ・「ベトナム人の移動とネットワークに関する研究——韓国アンサン『多文化村特区』を中心に——」 長坂康代 愛知東邦大学 兼任講師
- ・「APP データにみる訪日外国人旅行者の移動パターン」 杜国慶
- ・「宗教者の養成のための移動——フィリピンでのカトリック修道士養成：通過点としての語学学校に着目して——」 市川誠 本学文学部教授
- ・ Labor transplant: “Point-to-point” transnational labor migration in East Asia  
Biao Xiang オックスフォード大学 教授
- ・ Migration as class-based consumption: The Emigration of the rich in contemporary China ファーラー・グラシア
- ・「中国系移住者に関する比較社会学的考察——東京・豊島区池袋地域とミラノ・Via Paolo Sarpi をめぐって——」 田嶋淳子 法政大学 教授
- ・「日本人移住者の地域別居住動向——オーストラリアの大都市の事例を中心に——」 水上徹男
- ・ 総合討論

○刊行物 (2017 年夏、刊行予定)

2017 年 2 月のシンポジウムでの発表内容をもとに参加者が原稿を提出し、『流動する移民社会 2』として昭和堂から刊行すべく編集中である。題目、出版社については交渉中で、原稿は 2017 年 3 月末の時点でほぼ提出済み。英語論文については 2016 年度の予算で年度内に翻訳済みである。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①~④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

・ Mizukami, Tetsuo. 2016. "Urban Regional Developments in Inner City Tokyo: Toshima City Projects and Significant Sites of Local Cultural Heritage." 『社会学研究科年報 (*Bulletin of Sociological Studies*)』 No.23: 7-18.

・ Mizukami, Tetsuo. "Urban Regional Developments in Inner City Tokyo: Toshima City Projects and Significant Sites for Local Cultural Heritage." 『社会学研究科年報』 No.23, 2016, pp.7-18.

・ Ichikawa, Makoto, "Filipino Migrants and Religion: Comparison of Cases in Australia and Japan", 『立教大学教育学科研究年報』 第 55 号、2016 年 (刊行予定)

・ ファーラー "Migration as Class-based Consumption: the Emigration of the Rich in Contemporary China," *China Quarterly*, Vol. 224. 2016 年 (刊行予定)

② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

・ Ernest Healy, and Dharma Arunachalam, and Tetsuo Mizukami  
*Creating Social Cohesion in an Interdependent World: Experiences of Australia and Japan*. Palgrave Macmillan. pp289

・ 栗田 和明 (編) 昭和堂 『流動する移民社会—環太平洋地域を巡る人びと—』 2016 年 170 ページ 本書には SFR プロジェクト参加者が分担執筆しており、その内容は前ページを参照されたい。

・ Mizukami, Tetsuo (co-ed.) *Creating Social Cohesion in an Interdependent World: Experiences of Australia and Japan*. Palgrave Macmillan. 2016. (Co-editor with Ernest HEALY, and Dharma ARUNACHALAM). 2016. 289 ページ

・ 杜 国慶「文化ツーリズムと都市観光」 菊池俊夫・松村公明 (編著) 『よくわかる観光学 3 文化ツーリズム学』 朝倉書店、2016 年 (刊行予定)。

・ 栗田 和明 (編) 『流動する移民社会 2』 2017 年予定。詳細は様式 2-2 参照

③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

・ INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON Migration and Tourism Infrastructures in Global Cities 前ページを参照

・ 国際シンポジウム (2015 年度)、公開シンポジウム (2016 年度) 詳細は様式 2-1、2-2 を参照。

④ その他

・ 杜 国慶・澁谷和樹・野津直樹「APP データに見るインバウンド訪問者の空間構造」 2016 年 3 月 21 日、日本地理学会 2016 年春季学術大会 (早稲田大学熊谷キャンパス)